
未来のカケラお譲りします

ユリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

未来のカケラお譲りします

【Nコード】

N7359P

【作者名】

ユリ

【あらすじ】

未来のカケラが売り買いされる、この世界。昔はたくさんの方が買っていたカケラも、このごろでは人気低迷という状態。なぜ自分は占い師なんだー！と日々愚痴っているレイチェルもそろそろ本気で未来を心配せねばなくなってきた。弟子も一人。一人前になるまで面倒見てやらないと…などなど日々の悩みは絶えない。

いつものように暇をつぶしていたある日。何日ぶりかというような客人。

依頼の内容はごくごく簡単なものだった。しかし、それが連れ込んだ迷惑ごととはそうそう簡単に解決できるようなものではなく…。

さっぱりばっさりなレイチェルの奮闘といくつかの恋の物語。

この先どうなるのかなんて誰にも分からない。

だから、人々はいつも不安で、様々なものを疑いながら生きている。不安なゆえに、未来を知りたがる。

その希望に応えるのが私たちの仕事だ。未来のかけらを読み取り、売る。

私たちの示す未来を信じるものもいれば、信じないものもいる。

信じるものたちは私たちを敬うが、信じないのもたちは私たちと信者を蔑む。

私たちと信者は依存しあいながら生きてきた。

信者がいなくなれば、私たちは仕事をなくし、居場所をも失くす。

私たちを失えば、信者たちは未来に潰される。

その信者たちも段々と減ってきたこの頃。

今度は私たちが未来を憂う番となってきた。

この先、どうやって食っていくよ？

「おはようございます。」

朝起きてダイニングルームへ向かうと、いつも通り先に起きているブルークが私に声をかける。

「ねえ、聞いてくださいよ、お姉さん。私今朝早く公園に散歩に行ってきたんですけどね、誰に会ったと思います？」

ブルークはパタパタと手を上下に振りながら話す。

「ええ？誰よ？」

なんとなく答えは予想が付くが、話を続けさせる。

「ルイスですよ！もう私びっくりしちゃいましたよ、お姉さんあれ以来あの女にお会いになられた？」

ああ、ルイス。この子が手を振りながら興奮気味に話すときは気に入らない女の話に決まってる。

レイチエルは首を振りながら答える。

「いいや、会ってないねえ。あの子がこの家を出て行って、それきり。」

「あの女、ちよつと痩せたみたいでしたわよ。ろくに食べれてないんじゃないかしら。」

そう言いながらたっぷりとバターを塗ったトーストをほおぼる。

「なんであの女急に出て行く気になったのかしら？占い以外あの女にできることがあります？」

ブルークはズズつと紅茶をすすり、立ち上がる。

「じゃあ、私午後の集まりのためのお菓子、いろいろ買ってきますね。」

ブルークはスカートに落ちたトーストのかけらを払いながら言った。

「あー、ちよつと待ったブルーク。今日何の日か覚えてる？」

そう言うと、ブルークはこちらを見上げ、はて？というように首をかしげている。

すこしの間考え、「ごめんなさい、何の日でしたか？」

ごそごそとポケットを探り、私はブルークに小さな包みを差し出した。

「気に入ってくれるといいけど。」

昨日の夜、がんばって飾った包み。

「今日はブルークがこの家に入ってちょうど1年目。忘れてた？」
ブルークは綺麗なブルーの目を見開いて、両手でうけとる。

「まあ、お姉さんたら。私、すっかり忘れてましたわ。ええ、確かにそうですわ、今日で1年でしたね。

開けてよろしい？」

私が頷くと、ペリペリと包みをはがし始める。

「あ、らあ！」

気にいった？

「お姉さん！」

気に入った？

「なんて綺麗なの。すてきですわ。」

「気に入った？」

彼女に尋ねると、「もちろんですわ！ありがとうございます、お姉さん。」と何度も頷きながら答える。

彼女に贈ったのは石がひとつ付いた細い腕飾り。

「この石、お姉さんが作られたものでしょう？」

「うん、そう。ブルーク、前ひとつ欲しいって言ってたから、この機会にと思つて。」

「とっても綺麗ですわ。」

ブルークは手につけたものを目の上で光にかざしながら見つめている。

「できる限り身に着けているといいよ、占いをたすけてくれるはずだから。」

「ええ、もちろん外したくありませんわ。お姉さんが作られた石の

力はすごいって評判ですもの。」

笑顔で出かけていったブルークを見送り、ふうとイスに座る。
気に入ってくれたみたいでよかったあ…

あールイス。元気にしてんのかなあ？痩せたって言ってたなあ…
どうやって食ってんだろ？なんで占い師やめたくなっただんどう？
まあ気持ちかわかんないでもないけどさあー
今時流行らないしねえ…

「……うわっ」

肩をつかまれる感覚に眠りから呼び起こされ、目の前にいるブルークに驚く。

「な、何？寝てたね、私。」
にこにここと笑うブルークにわたわたと口元をぬぐいながら言う。

「ええ、ぐっすりと。ごめんなさいな、起こしちゃって。お姉さんにお客様ですわ。」

私が帰ってくるまで、ずっと扉の前で待たれてみたいですよ。」

客：何日ぶりだろ。

ブルークは私の耳元に口を近づけ、「若い殿方ですわよ！」と小さな声で囁く。

若い殿方：そう表される人が占い師のところへ寄り付くなんて、今時間がない。

ブルークが玄関のほうに向かって呼びかける。

「どうぞ！お入りになってくださいな！」

「うわっ、ちょっと待ってよ。よだれついてない？」

「若い殿方、に醜態を見せるわけにもいかない。」

「大丈夫ですわ、いつも通りお綺麗ですわよ。」

ふふふ、と笑いながら「じゃあ、私はキッチンで集会の準備をしておきますので。」とブルーク。

「あー、おっけー。」

ブルークは扉のところに戻っていた例の客人にすれ違いざまに「ゆつくりなさってくださいな。」

と丁寧な声をかけ、キッチンへと消えていった。

ブルークを目で追ったあと、始めて客人の顔を見た。

ああ、なるほどね。ブルークの言う通り、若い殿方、だ。

ほかになんていうんだろう？好青年…って言うほど少年めいていないしねえ。

少し、気まずい沈黙。ああ、こんなじゃだめだ、とすぐに気づき、客人に席をすすめる。

「どうぞ、座ってください。あー、ごめんなさい、外で待たせてたみたいで。」

「いえ、お気になさらず。」

声は特別高くもなく、低くもなく。標準。若い殿方、らしい声である。

すっとイスを引き、すたと座る。

「あー。私はレイチエルといいます。」

で、えーと、ここの店長で、ブルーク、あの女の子の師匠でもあります。」

まずは自己紹介からですよ？

「私はフランクといます。いきなり押しかけてきてすみません。今日伺ったのは、ある人の未来を占って欲しいからなんです。お願いできますか？」

「ええ！もちろんです。どういった内容の未来をご所望で？」

そのぐらいなら簡単簡単。さあ、占ってやろうじゃないか。

「ちょうど3ヶ月後の今日の未来です。私の…上司が何をしているのかを知りたいんです。できますか？」

「3カ月後ね、その日って絶対その上司の方と一緒にいます？いれば、簡単なんですけど。」

「はい！必ず一緒にいるはずですよ。」

「なら話は簡単ね、今からあなたの未来を見ます。一緒にいるならそれだけで大丈夫。その方の外見を教えてくださいます？」

「ええ、えーと、背は私より少し高く、黒い髪の毛です。目の色は少し灰色がかった青ですね。」

あとは…」

「ああ、それだけあれば十分ですよ。少し、お手を拝借。」

レイチェルはフランクの手をとり、軽く握った。

ふーん。背が高く、黒髪、ブルーグレーの瞳…

フランクは自分の手を取り、目をつむって何かぶつぶついつている占い師を不思議そうに見つめていた。

今、この占い師は自分の未来を見ているのか？

占いを信じているものが少なくなってきたこの時代、占いといえば貴族の間で誕生日に行われる余興の一つになっていた。結果自体にはこだわらず、雰囲気だけを買うのだ。

人々の声。花束。白いドレス。豪華な食事。誓いのキス？

「あー、こりゃ結婚式だね。」

「やはりそうですか！その新郎の顔は見えますか？」

新郎の顔ー？

あー、目が回る。こいつか？違う。新婦の隣、となり。

いた。

「黒髪でえー、えーと、顔見えないなあ…結構豪華な服着てますねえ。どっかの貴族っぽいですよ。」

「その人が私の上司です！新婦の顔は見えますか？そこを一番知りたいんですが。」

「新婦、新婦……。」

どこだー、見失っちゃった。

白いドレス、ドレス。

「あー、黒髪でー。背は低いほうですねえ。……………んんん？」

あれ？この新婦って…

「どんな方でしょうか？ほかになにか特徴はありますか？」

んんん？この女ってさあ、

フランクの心配そうな声が聞こえる。

「占い師様？」

ぱちつと目を開くと少しぼやけたフランクの顔。

「あのー。もしよかったら教えてほしいんですが、」

かすんだ視界をクリアにしようと、目をパチパチさせながら言う。

「なんででしょうか？」

「あなたの上司って、どこのどなた？」

3カ月後の、

「ああ、たぶんあなたもご存知の方ですよ。」

私の、

「国家付きの文人であられる、ジャック・ストーン殿です。」

3カ月後の、私の、夫、ジャック・ストーン。

誰だ、お前？私、ご存知じゃありませんが。

わたしの未来の夫はかなり有能な人物のようだ。

このフランクの物言いときたら……。なにが文人か！そんなに偉いのか文人って！

さっきからベラベラと、私は沈黙しているのをいいことに、上司の自慢をたれている。

この若者、はじめ見たときは、静かで疑り深そうな男、という印象をもったものだが、いまや上司を売り込むチャンス！といわんばかりの勢いで喋っている。

なんだと、異例の出世だと？学者たちの憧れの的だと？王からの信頼も厚いだと？

そんなこと私には関係ねーのよ！

なんて心の中で叫びつつ。

「はあ、そうなんですわー。」とあいまいな相槌を打っておく。

「ええ！そうなんです！

ああ、すみません。色々しゃべってしましまして……。もちろんご存知でしたよね？」

なんと、嫌味のない言い方だろうか。

いや、私はご存知ではありませんよ。世間知らずなもんで。みんなにそれはよく言われるですよー、とか言えないので

「あー、もちろんですよ。」と肯定。

「それで、新婦の方はどのような方でしたか？
見覚えなんてありませんか？著名な方でしょうか？」
新婦を知ることがこの取引の目的らしい。
ここで、はい！私が花嫁でしたよーなんて言ったらどうなるんだろ
う？イヤ、言わないけどね。

適当にごまかそう。

なーに、はなからこの男、占いなんて信じていないだろうよ！

「花嫁さんは見たことない方でしたよ。あまりはつきりは見えなかつたんですが、どこにでもいそうな若い女の人でした。」
レイチエルはしれっと嘘をつく。

この商売、嘘を言つてナンボである。いや、そんなことは断じてないのだが、今回はかり許されよう！

それを聞いたフランクははーっと小さくため息をつき、
「そうですか…。髪の色なんて見えなかつたですか？」
と尋ねる。

「あー、茶色じゃないっすかね？そんな風に見えましたよ。」

それを聞いたフランクは少し不思議そうな顔をした。

な、何よ？

少しムツとして見返すと、こちらの表情に気づいたのか、すこしあわてて取り繕う。

「あの、いえ。実はこれで花嫁殿について占ってもらうのは、8
回目です…。」

そのすべての結果で、花嫁は黒髪だ、という結果だったのです。茶色というのは確かでしょうか？」

いや、嘘です！黒でした！！

肩までぐらいの癖のある黒髪でした。てゆうか、私です！

「いやー、確かじゃないんですがねー。

うーん。なんとゆうか、占いとゆうのはですね…すべて確かじゃないとゆうか…。

統計が取れるってわけでもなくて…。」

なんだ、フランクめ！この占い師インチキじゃないか？って丸出しの目つきしやがって！

「いえ、すみません。茶色の可能性もあるということ…。」

なんだ、この感じ。

私が間違えたみたいないな！！私の腕は確かですから！

ちゃんと黒髪って見えましたからね！嘘ついただけです…。

「ええええ、その可能性もありますよー。」と笑顔でいっておく。

それにしても、なんでフランクは花嫁についてしらべてるんだ？

ふと気になってフランクに聞いてみると、微妙な顔をする。

「実は、ジャック殿が、先日29回目の誕生日を迎えられて、その祝賀会の席に占い師をひとりお呼びしたのです。」

「あ、おめでとついでいます。」

めでたいじゃないか、29歳なんて。さぞかし豪華だったことだろう。誰が決めてそうなったのか、起源は知らないが、この国では9のつく誕生日に盛大なパーティーが開かれる。

私も19の誕生日のときに師匠にお祝いしてもらったのを覚えている。

初めて飲んだお酒はラム酒で、夜中に家の表で盛大に吐いてしまったのを鮮明に思い出した。

なぜあんな強い酒飲ませたんだ、師匠よ！

しかし、そのおかげか何故かは分からぬが、めっぼう酒には強くなり最近は何となく飲みすぎは毒ですよ、と幾度となく注意された。これで煙草も吸っているのだから最悪だ。自分でも将来が心配である。

「あ、ありがとうございます。」

照れたように礼をいうフランク。

「いやいや、あんたにお祝い言ったわけじゃねーわ。あんたの上司にだよ！」

なんとも、このフランクという男、よっぽどストーンとかいう上司を愛しているように見える。

話しを元にもどそうではないか！

「で、その占いの結果はどうだったんで？」

「その占い師は、ジャック殿が半年後に結婚するだろう、と言ったのです。」

その花嫁はすべてに影響を与え、いつか何か大きなものを変えてし

まうだろっ、とも。」

うひゃひゃ、で、その花嫁が私ってオチなのか？
笑わせるんじゃないー！

私に何を変えろと？国か？はたまた世界の理か？

「その占い師、信用できる筋のものなんですか？
出鱈目いつてる可能性だってあるのに。」

その占い師が確かな腕をもってるのは確かなんだろっ。私も見たのだから。その男が結婚式をあげている未来を…私と。
それにしたって信じるのか？信じたのか、そのストーンは。
今時占いを信じるものなんていないのに！

「私は信じる必要はない、そう思ったんです。占いなんて昔用いられていた術ですし、信憑性なんてひとかけらも……ゴホン、失礼……」

聞き捨てならんぞ、そのせりふ！
占いが昔のものだと？信憑性がないだと！

私がそういう思いをこめながらじーっとフランクを見つめると、彼もそれを感じ取ったのか、失礼をわびた。

ふん、口先だけだろっ、どうせ！

「で？」
続きをつながず。

「しかし、ジャック殿はそれを疑うことはせずに、私にその花嫁に

ついで調べるようお命じになりました。ジャック殿に、近々花嫁になるような近い方はおられないそうで…。

この3ヶ月ちかくの間、私も調べまわったのですが、あまり手がかりは得られずに、最近はこのようにして占い師の方のところを尋ねて回っています。しかし、今回もまたあまり芳しくない結果に…。

「

「はあ、すみませんね。」
さらっと答える。

なんで私がストーンと結婚に至るのかは謎だが、いいさ。

占いだって絶対じゃない。私がこれから気をつけて生活していればストーンとやらと出会うこともないだろう。

未来は変えられるものだからな。師匠のところ弟子入りして、最初に教えられたことだった。

悪い事態を避けたいからこそ、人々は占い師から未来のかけらを買うのだと。

ただ単に何が起ころのか知りたいから、という理由でかけらを買うものはいないのだ。

「さあて、このぐらいでよろしいですかね？これ以上続けても花嫁の正体に迫るかけらは見つけられそうにないので。」

さっさと切り上げよう。そして絶対安全な対策法を考える。ストーンに会わないための。

結婚なんてクソくらえだ、正直。

なんたって、私はまだ若いのよ！

「ええ、そうですね。ありがとうございます。」

これ、お礼です。」

緑のつやつやした生地でできた財布。みっちり膨らんでいるように見える。

おお、羽振りがいいねえ、ストーン殿。

まだ出会ってもない花嫁のためにこんな大金はたくとは、どんなやつなんだろう？

「はい、確かに。まいどありー。」

フランクをドアまで見送る。

ドアまで行くまでに、フランクがじゅうたんの切れ目でつまずいたが、気づかなかったふりをしてあげた。心の中では笑ってやったけど。

「じゃあ、また占ってほしいことがあれば！」

別れ際にすこし売り込んでおく。

どうせ来ないでしょうがね！

フランクは丁寧にお辞儀をして帰っていった。

律儀だねえー。

さあーて。

「ブルーク！」

家の中に戻りつつ、大声で彼女をよぶ。

「今日は夜ご飯豪華にしよう！」

久々に儲かった！」

おくからブルークが出てきて、

「あら、そんなに謝礼金いただけたんですか？
なにを占ってさしあげたんですか？」

「そうなのー。今日は運がよかったかも！

ただ近い未来を占ってあげただけだよ。あんまり価値のある答えは
渡せなかったんだけど、それでも満足してくれたみたいだし。」

上機嫌で返す。

フランクが店にいたのはたった30分くらいだった。

その30分で200パムだと？

こんなにいい商売ほかにねえ！

ブルークにそういうと、

「じゃあ、私にもこの3ヶ月ぶんのお給料、払っていただけますね
？」

にこつと笑いながら、言われる。

「も、もちろん！月80だから…えつと200ぐらい？」

「240パムですよ、お姉さん。」

計算は苦手なのである。

30分のレイチエルのいんちきは、3ヶ月ぶんのブルークの頑張りに劣るようだ。

「ごめん、やっぱり今日のご飯、いっつも通りね。」とレイチエル。

「だーから、みんなで協力すれば出来るかもしれないでしょーが！
何やらないうちから諦めてんのさー。」

レイチエルはこれまで何度言ったか分からない言葉をまたも叫んだ。
叫んだついでに、口からブルークが作ってくれたクツキーのかけら
が一緒に飛び出る。

「キタネー。」

いつものように突っこんでくるのは、レイチエルの兄弟子である
チエイ。

いつもと変わらず危機感をもっていない自分の兄弟子をキツと睨む
レイチエル。

「自分だって、机の上にぼろぼろこぼしてんでしょーが！」

怒鳴ったついでに、またもクツキーが口から出てしまった。

「キタネー。」

ニヤニヤと笑いながら性懲りもなくからんでくるチエイから視線を
外し、集会に出席した面々を見渡す。

前回より集まる人数かーなり減ったわね…。

前まではブルークと二人でしていた集会の準備も、いまではブル
クだけで事足りるような状態になってきた。

「いっつも言っとなるんじゃけどねー。みんなでない金出し合っつて、
連盟作ったってー。いまさら未来のかけらなんか買う人は増えんと

思っんよー。」

第一回目の集会から参加しているメリッサは、毎回このようなことを言う。

このくそばばあ！

話が進まん！

「私だって毎回毎回言ってるけど！やってみなきゃ分かんないだつてば！

いつまでも堅いことばつか言ってるから時代においてかれるのよ。

私が提案してる通り、みんなで資金を出し合つて占い師同士で連盟をくんで、顧客を分け合う！

いわば会社よ。みんなで資金を出せあえば各地に小さい店舗だつて開けると思っし。」

「だいたいメリッサが構えてる辺境になんか今時誰も来ないでしょう？」

メリッサは表情をひとつも変えずに続ける。

「でもねえ、そうゆう事したら占いの価値が下がると思っんよねえー。」

誰にでもかけらを譲るとゆうことじゃろ？」

「違う違う。私が言いたいのは、みんなに占いを利用してもらう機会を増やそうつてことよ。安売りしたいわけじゃない。」

前も説明したろ！

こつも毎回毎回堂々巡りだと、説明する気力も失せてくる。

最近、こいつらただでお茶会したいから集まつてんじゃねーか？と本気で疑いを持ってきた。…たぶん私の推理は当たつている！

私の力説にもかかわらず、みんなお茶を飲んだりお菓子をつまんでばかりいる。

もうだめだ！これだけ言っても動かないってことは最早一筋の望みもなし！

「もういいや。私一人でやるから。帰った帰った！」

もう爺婆なんてしーらね！

「ブルーク、みんなもう帰るから！」

ブルークを呼ぶと二階のほうからトントンツと階段を下りてきた。

「あらあ、もう皆さんお帰りなの？」

ぞろぞろと扉に向かう爺婆たちを見ながら残念そうに言う。

「私、ひとつ占いを終えたらご一緒に話をうかがおうと思っただんですのにー。」

それを聞きとめたチェイが

「あーら、残念だねそりゃ。僕もご一緒にしたかったナー。」とブルークの手を取ろうとしながら言う。

その手を美しく避けたブルーク。

「それで、お話はまとまりましたのー？」

「全っ然！交渉決裂だよ！」

あの石頭どもめ。」

そう叫ぶと、まだ帰ろうとしないチェイがうはは、と他人事のように笑う。

「何なんだ！あんたも私の兄弟子ならちょっとぐらい肩もってくれたっていいのにさー！」

「いやー。アイデアはいいと思うんだけどねー。お金がないからねえ、僕にも！」

ホントは助けてあげたいんだよー？」

助ける気なんてなくせに、チエイのやつ。

「まあまあ、レイチエルはレイチエルで頑張ってみなよ。根本的なところで賛成してない人たちを無理やり君の組織の中に入れて、あとから揉めるのは目に見えてるしー。」

「師匠ならレイチエルに賛成したんだろうなー、と続けて小さくつぶやく。」

「私、いつも聞きたいと思ってたんですー。お二人の師匠さんってどんな方だったんですか？」

大きな目をくりくりさせながら私とチエイの顔を交互に見ながら尋ねる。

「どんな人って…ねえ？言葉じゃ言い表せないよね、レイチエル？」

「ニヤニヤしながらこちらを見ながら言う。」

「あの人のことはどーでもいい！

死後の世界でよろしくやってんでしょうよ、どうせ！」

あはは、とチエイが笑って続ける。

「確かにそうだろうねえ。どこでも自分らしくやれる人だから。才能だろうね、あれ。」

その才能を手にして、あの女のようになってしまうなら、その才能断固拒否だ！

「ふふふ。楽しいお方だったんですねー。なんだかそんな感じがしますわ。」

ブルークが口を隠しながら笑う。

「あ、分かった？」

「ええ。なんとなく。また今度お話しかせてくださいな、チエイさん。」

モチロン！と意気込むチエイを玄関に押しやる。

「じゃあね、兄さん。今度来るときは寄付金持ってきて。じゃないと家にいけないから！」

ええー、なにソレー！とわめくどうしようもない兄弟子を向こう側にボタンと閉じ込めた。

レイチエルに家から追い出されたチエイはすこしの間、その扉をぼーっと見つめたあと、自宅へ帰ろうと足を動かした。

「あーあ。昔はかわいい妹弟子だったのにナー。」

なんであんなサバサバした子になっちゃったんだろー。などぶつぶつ言いながら歩いていった。

「ふー、疲れた。」

扉をあげようとしたが、何かが扉の向こう側にあるようで開かなかった。

「ええっ、何これー？」

家はいれないじゃーん。」

「あー、だるいったらしょうがない！

占い師も世の末！あとで後悔するがいいわー。絶対成功させてやるからー！」

椅子にどかっとなんて座ってブルークに零す。

「お姉さんなら出来ると信じてますわよー。私も出来る限りお力になりますからー。」

みんなが食べ散らかしていったクッキーやらお茶やらを片付けながらブルークが言う。あいつら、本当に全部食べつくしていったわね。クッキーのカスしか残ってやがらん！

「ありがとうね。私にも確信なんてものはないし…どうなるかは分からないんだけどー。こうなってくるとやるしかないし。」

はー、とため息をひとつ。

「まずは宣伝！新聞社に頼みたいんだけど、どのくらいかかるか知ってる？」

「新聞社ですかあ…最低でも100パムはかかると思いますよー。」

100パム!!!

「ねえねえ、ブルーク。お願いがあるんだけどー？」

たっぷり裏を含んでいる声音で尋ねる。

「なんですかー？」

「あのさー、

お給料、もう一月待ってもらっていい?」

「……。またですか?」

「ゴメンツ!!!」

ぱんつと両手を合わせて謝る。ああー、こんな私がこんない子の
師匠でいいのか?

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7359p/>

未来のカケラお譲りします

2011年10月8日08時40分発行